様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：１３９０４
研究種目：若手研究
研究期間：2022～2023
課題番号：２２Ｋ１３１３６

研究課題名（和文）結果句の意味に着目した英語結果構文の研究

研究課題名（英文）A Study of English Resultative Constructions with a Focus on their Result Phrases

研究代表者
浅井　良策（Asai, Ryosaku）

豊橋技術科学大学・総合教育院・准教授

研究者番号：３０９０９１０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、英語の結果構文における個々の結果句や結果句内の語の意味特性を調査し、それらの中に複数の意味解釈を持つものが存在することを確認した。また、それらの結果句が示す意味的多義性に応じて、共起する動詞にも微妙に異なる解釈が与えられ得ることが判明した。このことから、結果句によって喚起されるフレーム知識の要素に動詞の意味情報が書き込まれる解釈メカニズムや、結果句のフレーム知識からの要請に合致するような動詞の意味タイプが選択されるような解釈メカニズムの存在が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
先行研究においては、英語の文法構文の成立や全体的な意味解釈は動詞の意味特性によってかなりの程度決定されるという捉え方が根強く、結果構文もまさにそのような事例と言える。しかしながら、そのことは全ての結果構文に当てはまるわけではなく、とりわけ何らかの特異性を示す周辺的事例に関しては、動詞よりもむしろ結果句の方が意味解釈上の影響力を持つ場合がある。本研究はこのようにあまり着目されてこなかった動詞以外の要素の意味特性に目を向けることで、文法構文の成立及び解釈メカニズムの研究に一石を投じた。

研究成果の概要（英文）：This study has found out that some resultative phrases are associated with multiple senses, by examining the semantic nature of them or words within them.It has also been turned out that verbs can be given subtly different interpretations, depending on the polysemy of the resultative phrases with which they occur. It is thus suggested that there exist interpretive ways in which verbs fill in the details of a frame element in the frame evoked by a resultative phrase, or verbs compatible with the knowledge in the frame are selecetd.

研究分野：認知言語学

キーワード：結果構文　結果句　意味フレーム　多義性　概念的依存　心理的Force　様態と結果

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

類似した意味を持つ動詞間であっても英語の結果構文への生起可能性に相違が見られるなど動詞の意味特性が結果構文の成立や構文全体の意味解釈に大きな影響力を持っていることがこれまでの先行研究で明らかにされている。しかしながら、結果句も動詞と同様、結果構文の必須の構成要素の一部であるため、結果句の意味特性に関しても、結果構文の全体的な意味解釈に何らかの形で利用されている側面が見出されるはずであると考えていた。そして実際のところ、(1)He drove himself into trouble.や(2)He wrote himself out of a job.のように、同一の動詞と結果句の組み合わせであっても、結果句が示す意味的多義性に応じて共起する動詞に微妙に異なる解釈が与えられ得ることを確認する機会を得た。そのことを一つのきっかけとして、結果句が結果構文において共起する動詞や構文全体の意味解釈にどのような影響を与えるのかについてより詳細に探究してみようという思いに至った。

２．研究の目的

本研究では、動詞の意味情報だけでなく結果句の意味情報の重要性にも目を向け、両者の相互作用を規定するメカニズムを解明しながら、結果構文によってコード化され得る様々な「構文的意味」の成立基盤をより包括的に説明できるモデルの構築を目指すものである。英語の結果構文において、(1)He wiped the table clean.や(2)He hammered the metal flat.のように物理的操作に基づく直接使役関係を表すタイプの事例が存在することはよく知られている。しかしながら、(2)He wrote himself out of a job.のように「間接使役関係」を表すタイプや(3)The telephone startled me awake at half past ten.及び(4)This unexpected answer shocked them into silence.のように「心理的 force に基づく使役関係」を表すタイプについては先行研究でほとんど扱われていない。これらは使用頻度もそれほど高くなく周辺的な事例に位置づけられるが、共通する特徴の一つとして、結果句として生じる語(句)が複数の意味解釈を許すということが挙げられる。そこで、本研究では、表現し得る意味範囲が比較的広い上記の into trouble, out of a job, awake, into silence のような結果句の意味特性に着目して、それによって共起する動詞がどのような意味解釈を受け、また結果構文が文パターンとしての表現範囲をどのように拡張させているのかについて解明を試みた。

３．研究の方法

まず、「フレーム意味論」(Fillmore 1982)の考え方を援用した。フレーム意味論は、語の意味理解には語によって喚起される意味フレームを参照することが必要であると考え、そのような背景知識の観点から語とその共起要素の関係やそれらによって構成される言語表現の意味解釈などに対して説明を与えようとするものである。結果構文の成立に対してフレーム意味論的なアプローチを採る先行研究では、動詞が喚起する意味フレーム情報の分析に焦点が置かれてきた(Boas 2003,Iwata 2020 など)。そこでは、結果句によって表される概念内容は動詞の意味フレーム内のフレーム要素に相当するものとしてしか扱われていない。しかしながら、本来フレーム意味論では、基本的に意味内容を示す全ての言語表現が意味フレームを喚起するとされており（Fillmore and Baker 2009: 318)、当然のことながら結果句もそれ自体の意味フレームを喚起すると見なすことが可能である。このように、単一の文において複数の語句がそれぞれの意味フレームを喚起し得る場合、それらのフレーム同士が統合することで文全体の意味解釈が構築されることが指摘されている（Hasegawa et al. 2006)が、本研究では、先述のように同一の動詞と共起する場合であっても結果句の解釈によって微妙に異なる状況が表される事実を捉えるために「概念的依存関係」(Langacker 1987,1991)に基づくフレーム統合モデルを提示した。このモデルに従えば、動詞によって喚起される意味フレーム内のフレーム要素が担う役割に結果句側の意味情報を書き込む概念的依存関係だけでなく、その逆の構図、すなわち結果句によって喚起される意味フレーム内のフレーム要素が担う役割に動詞側の意味情報を書き込む概念的依存関係をも規定することが可能となる。

これらのことを踏まえて、本研究では、動詞と結果句間において後者のような概念的依存関係が認めれられるようなタイプの特性をより詳細に解明するために、COCA や BNC などの大規模コーパスを利用して、これらのタイプに生起する個々の結果句を中心にそれらがどのような動詞と共起しているか調査した。またその際、異なる動詞の種類だけなく、同一の動詞が繰り返し使用される個別的頻度も計測した。さらに、同一の動詞と共起する場合であっても結果句の解釈によって微妙に異なる状況が表される場合があるため、そのような用例については単に量的に処理することに留まらず、連動して動詞に異なる解釈が見出されるのかどうかその使用文脈の内容も慎重に確認した。そしてそのような事例に該当するものとして採取したデータを分析する際には、複数の意味解釈が可能な結果句は複数の異なる意味フレームを喚起するという想定の下、それぞれの意味フレームに関わるどの部分にどのような様式で動詞側の意味情報が書き込まれているのか観察及び考察を行った。

４．研究成果

本研究では、英語の結果構文における個々の結果句や結果句内の語の意味特性を調査し、それらの中に複数の意味解釈を持つものが存在することを確認した。また、それらの結果句が示す意味的多義性に応じて、共起する動詞にも微妙に異なる解釈が与えられ得ることが判明した。このことから、結果句によって喚起されるフレーム知識の要素に動詞の意味情報が書き込まれる解釈メカニズムや、結果句のフレーム知識からの要請に合致するような動詞の意味タイプが選択されるような解釈メカニズムの存在が示唆された。

(1) 結果句 into trouble と out of a job について

名詞 trouble の辞書記述における意味を基に、当該結果句が[困難/危険]と[非難/処罰]という異なる 2 種類の意味フレームによって特徴づけられるという分析を提示し、それによって①He drove himself into trouble.のような事例において可能な 2 種類の解釈が説明されることを明らかにした。①は「運転した直接の結果として水で氾濫した道路に突っ込んでしまった状況」に加えて「運転した結果、その社会的帰結として警察沙汰になってしまった状況」も描写することがある。後者の解釈の場合においては結果句 into trouble は[非難/処罰]フレームを喚起すると言えるが、同時に動詞 drive の方も単なる「運転行為」というよりも「違法行為の手段」として解釈できることが採取した実例における具体的な文脈や共起要素の意味内容からも容易に読み取れた。本研究では、上述の「概念的依存関係」(Langacker 1987,1991)に基づくフレーム統合モデルの観点からこのような動詞に対する意味解釈の説明が可能なことを示した。「運転行為」から見て「警察沙汰になるという状況」は通常それほど際立ったものとして捉えられない一方で、「警察沙汰になるという状況」から見て「違法行為」はその直接的な原因として高い認知的際立ちを持つ。そのようなことから、ここでは結果句 into trouble によって喚起される[非難/処罰]フレーム内のフレーム要素である「違法行為」が担う役割に動詞側の意味情報「運転行為」が書き込まれるという概念的依存関係が見出されるのである。

また、結果句 out of a job についても同様のことが当てはまり、job の辞書記述を考慮しながら、当該結果句に[義務]と[雇用]の 2 種類の意味フレームを仮定することで、②He wrote himself out of a job.の多義的解釈が説明されることを示した。②の形式を持つ文に対しては「小説を書き終えた結果、執筆する義務から解放された状況」や「盗用記事を書いた結果、所属する新聞社から解雇処分を受けた状況」を描写する文脈の存在が確認される。前者の解釈には out of a job の[責務]フレームが関わるが、ここでの out of a job 自体が指し示す「義務からの解放」は「執筆行為」の終結点に生じる状況を表すという点において、動詞 write が喚起する[テクスト創造]フレーム内の「行為の結果」というフレーム要素に情報を書き込んでいると言える。しかし一方で、後者の解釈において動詞 write が単なる「執筆行為」ではなく盗用という一種の「違反行為」として捉えられるのは、結果句 out of a job が喚起する[雇用]フレーム内の「失職の原因」というフレーム要素に対して動詞 write が情報を書き込むという概念依存関係が反映しているからなのである。このように本研究では、これまで指摘されてこなかった結果構文の解釈メカニズムを１つ新たに発見したことになると言える。

(2) 結果句 awake について

大規模コーパスを用いて結果句 awake を伴う結果構文の事例を採取した結果、結果句 awake が上述の into trouble と out of a job 以上に多様な意味解釈が可能であり、「眠りからの目覚め状態」(awake-1)という基本的な意味に加えて、「覚醒状態の強化」(awake-2)、「機能的活性化」(awake-3)、「無知からの目覚め状態」(awake-4)という 3 種類の意味が新たに確認されることに至った。そして、これらの意味は awake-1 の意味を軸にネットワークを構成していることが示された。awake-2 は形容詞 awake 自体が文脈によって段階性解釈を許すという特性に基づいて awake-1 から関連づけられる。また、awake-3 にはこの awake-2 からのメトニミー的拡張が関わり、awake-4 には awake-1 からのメタファー的拡張の関与が確認された。さらにこれらの結果句の意味と連動して、共起する動詞にいくつかの興味深い特徴が見られた。結果句 awake は、先行研究において物理的 force を表す動詞と共起するものとしてしか認識されてこなかったが、COCA コーパス調査によって、全体の約 17.5%(622 例中 109 例)の頻度で心理的 force を表す動詞とも共起することが明らかになった。

本研究では、このような事実についても結果句によって喚起されるフレーム知識の観点から取り扱うことが可能になることを示した。自然に目が覚める場合とは異なり、外的な働きかけを受けて「眠りからの目覚め」が引き起こされる際には、そこに物理的な打撃・接触が関わる場合であっても、その被使役者は同時に何らかの心理的経験も被っていると言える。そのようなフレーム知識を参照することで、awake-1 および awake-2 が startle, shock, jar, scare のような心理的 force を表す動詞と共起することや、それらが物理的 force と心理的 force の両意味用法が確認される shake や jolt のような動詞における後者の用法と共に使用され得ることが説明された。一方で、awake-3 と awake-4 に関しては、その意味特性から心理的 force を表す動詞のみとの共起が予測されるが、興味深いことに slap, smack, kick のように、本来物理的 force しか表さない動詞との共起が見られた。当然のことながら、これらの動詞は、意味上、文字通りの物理的 force を表しているわけでなく、結局のところ心理的 force が関わるものとしてメタファー的に解釈されているのである。このような事例を指摘することによっても、動詞や結果構文

全体の意味解釈に対する結果句のフレーム知識の影響力を明らかにできたと思われる。

(3) 結果句 to silence と into silence について

COCA コーパスを利用して、to silence と into silence のそれぞれが共起する動詞を調査することによって、ほぼ同一の形式を持つ結果句間であっても動詞の意味解釈に異なる様式で影響を及ぼし得ることを示した。両結果句と共起する動詞にはある程度の共通性が見られるが、まず、Rappaport Hovav and Levin(2010)らが提唱する「様態動詞」と「結果動詞」の区分を取り入れてみると、両結果句の特性の相違が浮き彫りになってくる。to silence については「様態動詞」が 49 例、「結果動詞」が 54 例と 2 種類の動詞の分布が大体同じくらいであった一方、into silence については、総頻度に対する「結果動詞」の割合が 90%(337 例中 304 例)と圧倒的に高いことが判明した。これらの分布上の相違は、to 結果句が「何らかの尺度上の抽象的な移動」を表し、into 結果句が「容器に入るプロセス」を表す傾向にあるとする Iwata(2020)の特徴付けから予測可能である。しかし、to silence は同じ様態動詞でも wave や motion のような身振り行為を表す動詞とは共起可能であるが、beat や kick のような打撃・接触動詞との共起はコーパス上で観察されず、実際のところインフォーマントによっても容認不可能な組み合わせであると判断された。さらに、to silence は結果動詞との共起に関しても frighten や startle などの動詞は容認されるけれども、これらと同じく心的刺激を表す動詞としてカテゴライズされる intimidate や bully のような動詞との共起が不可であることが判明した。

これらの事実を説明するために、本研究では、to 結果句と into 結果句の意味に加えて、silence に認められる「音が存在しない状況」、「ある事柄に対して意見することを拒む状況」という 2 種類の意味にも着目することを提案した。この観点に従えば、to silence は「音量の最小値への推移」、into silence は「(意見の抑制による)反抗から服従への変化」として特徴づけられることになる。beat や kick が表す打撃・接触行為や intimidate や bully が表す脅迫行為によってもたらされる結果事象は、単に被使役者の「音量の最小値への推移」というよりもむしろ「(意見の抑制による)反抗から服従への変化」であると捉える方がより自然である。このことから、これらの動詞が to silence ではなく into silence と共起するということの動機付けが確認されるのである。このように、結果句の構成要素である前置詞(to, into)の概念的意味と名詞(silence)の多義的意味との整合性に基づいて、様態動詞か結果動詞かを選択する傾向や各動詞タイプ内における個々の動詞間の容認性の相違が規定されるということを明らかにした点も本研究における重要な意義の一つと言えるだろう。

(4) 今後の展望

本研究おいて、結果句の意味特性が共起する動詞の意味解釈に様々な面で影響を与え得ることが示されたが、結果構文全体の意味解釈に対する影響についてはあまり包括的な分析を実現することができなかった。ただし、本研究で得られた知見からこの目的を達成するための見通しがすでにある程度立てられている。He wrote himself out of a job のような事例においては、結果句の異なる解釈に応じて動詞が異なる解釈を受け、「小説を書き終えた結果、執筆する義務から解放された状況」や「盗用記事を書いた結果、所属する新聞社から解雇処分を受けた状況」が表されることをすでに見たが、構文全体としては、前者と後者は「直接使役」と「間接使役」の意味的使役タイプに区分することができる。この区分には結果句の意味特性が大きく関与していると言えるが、他の事例にも同じことが言えるかのかまたそうでない場合には、どのような要因で「間接使役」型の結果構文が成立するのか探究していきたいと思う。

＜引用文献＞

Boas, Hans (2003) *A Constructional Approach to Resultatives*, CSLI Publications, Stanford

Iwata, Seizi (2020) *English Resultatives: A Force-Recipient Account*, John Benjamins, Amsterdam.

Fillmore, Charles (1982) "Frame Semantics," *Linguistics in the Morning Calm*, ed. by The Linguistic Society of Korea, 111-137, Hanshin, Seoul.

Fillmore, Charles and Collin Baker (2009) "A Frame Approach to Semantic Analysis," *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis*, ed. by Bernd Heine and Heiko Narrog, 313-340, Oxford University Press, Oxford.

Langacker, Ronald (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. I: *Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press, Stanford.

Langacker, Ronald (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. II: *Descriptive Applications*, Stanford University Press, Stanford.

Hasegawa Yoko, Kyoko Ohara, Russell Lee-Goldman and Charles J. Fillmore (2006) "Frame Integration, Head Switching, and Translation: Risk in English and Japanese," Paper presented at the 4th International Conference on Construction Grammar, Tokyo, Japan, Septemper 1-3.

Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2010) "Reflections on Manner/Result

Complementarity," *Syntax, Lexical Semantics, and Event Structure* , ed. by Malka Rappaport Hovav, Edit Doron, and Ivy. Sichel, 21-38, Oxford University Press, Oxford.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 浅井良策	４．巻 45
２．論文標題 心理的forceによってもたらされる「目覚め」と結果句awakeの多義性	５．発行年 2023年
３．雑誌名 雲雀野	６．最初と最後の頁 1～16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 浅井良策	４．巻 23
２．論文標題 結果句によって喚起されるフレームの役割について	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本認知言語学会論文集	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 浅井良策
２．発表標題 結果句によって喚起されるフレームの役割について
３．学会等名 日本認知言語学会 第23回大会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関